

初産褥婦の産褥早期における被養育体験の意味

南田 智子¹, 井関 敦子¹

Abstract

This study was intended to clarify the significance of primiparas' experience of being raised in the early puerperal phase, and identify ideal nursing support for them. From a questionnaire survey conducted for 30 primiparas after term delivery, five categories were extracted. Recalling their experience of being raised, the primiparas were going to "apply what they had learned from their parents to their own child-raising", "raise their children with their parents' advice in mind," and had "confidence in applying what they learned from their parents' to their own child-raising." On the other hand, they expressed anxiety from a "fear of possibly reproducing their parents' mistakes in child-raising." Those who were trying to "stand apart from their parents' method of child-raising" recognized that it differed from their own method. These findings indicated that accepting and integrating their experience of being raised could provide primiparas in the early puerperal phase with an opportunity to renew relations with their parents, and work as an important process to form the basis of their child-raising ideals. It was suggested that nurses aiding primiparas in the early puerperal phase should help them accept and integrate their experience of being raised.

Key Words: early puerperal phase, primiparas, experience of being raised, internal working model, child-raising

I. 緒言

近年、周産期において母親が児に向ける愛着についての関心が高まっており、母親の愛着には内的ワーキングモデルが大きく関与すると言われている。内的ワーキングモデルとは、養育者との関係の中で形成される認知的枠組を示し、Bowlby¹⁾は早期の愛着関係での具体的な相互作用の経験を通じて形成され、年齢とともにその変容可能性を減じながら、その後の個々の様々な特性や対人関係にまで影響を及ぼすと述べている。内的ワーキングモデルは成人の愛着研究においても、特定の関係を越えてその後の対人関係様式全般にまで幾分かの影響を及ぼすと仮定されており、愛着の安定性や継続性を保証するために重要な役割を担う²⁾。

先行研究では、母親の内的ワーキングモデルと胎児および乳児への愛着の関連性³⁾について、愛着に及ぼす要因は、子供時代に母親から受けた養育態度の中の保護⁴⁾だと言われている。しかし母親となる者が内的

ワーキングモデルの基礎となる被養育体験をどのように認識しているのか、また親の子育てをどのように評価しているのかを具体的に示した研究は少ない。産褥早期の母親は母親役割を受容し、獲得していく感受性の高い時期である。その時期に母親が被養育体験をどのように捉えているかを明らかにすることは、内的ワーキングモデルの構成過程を把握するために重要なポイントであると考えられる。

II. 研究目的

本研究は初産褥婦（以下、褥婦とする）の産褥早期における被養育体験の意味を明らかにし、看護者の支援の在り方を検討することを目的とする。

III. 用語の定義

本研究での産褥早期とは、分娩後から産褥6日まで

1. 三重大学医学部看護学科母子看護学講座

と定義する。被養育体験とは、親から受けた養育に対する思いと定義する。

IV. 研究方法

1. 対象者

県内の施設で正期産分娩となった分娩後から産褥6日の褥婦において、重篤な産後合併症のない者と重篤疾患の既往歴がない者とする。

2. 調査期間

2003年10月～2004年1月

3. 調査方法

対象者に対し無記名の自記式質問紙を産褥1日に配布した。質問内容は「親の子育てをどのように受け止めているか、自分の子育てとどのように関係すると思うか」とし、自由記述形式とした。質問紙は産褥6日の退院時に回収した。

4. 分析方法

対象者より得られた記述データをもとに意味関係に基づいてサブカテゴリーを組み、次にサブカテゴリー間の関係性を類似性と相違性によって対比させて検討を繰り返した。概念を統合できるものをカテゴリーとした。分析結果の妥当性を高めるために、データからカテゴリー化を図る過程で数名の母性看護学・助産学領域専門家よりスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

対象の褥婦には質問紙配布時に、研究の目的、方法、参加者の権利について書面と口頭にて説明し、研究協力を依頼した。その際、匿名性の保持やデータの保管と研究終了後の処分について説明し、同意書に署名を得た。

V. 結果

対象者は褥婦30名のうち20歳代が20名(67%)、30歳代が10名(33%)であった。家族形態は単一家族が22名(73%)、複合家族は8名(27%)であった。

褥婦は被養育体験をどのように認識しているのかを分析した結果、【親からの学びを子育てに生かす】【親の意見を参考にして子育てをする】【親からの学びを自分の育児に生かせる自信】【親の子育ての欠点を再現するかもしれない恐れ】【親の子育てに距離をおく】という5つのカテゴリーが明らかになった。な

おカテゴリーは【】で示し、サブカテゴリーは〈〉で示す。データは小文字で表記する。以下にこれらのカテゴリーとカテゴリー間の関連性について述べる。

1. 【親からの学びを子育てに生かす】

【親からの学びを子育てに生かす】は、〈親を自分の子育ての手本にする〉〈親が自分にしてきたように子供を躾ける〉〈親がしてくれて自分が感謝していることは子供にもしてやりたい〉〈親から受けた愛情を我が子にも感じてもらいたい〉の4つのサブカテゴリーを含んだ。

(1) 〈親を自分の子育ての手本にする〉

褥婦は被養育体験の中で見てきた親の子育てを、お手本と捉えていた。教えられてきたことが役立っていることから、親を子育てのお手本にしたいと考えていた。

「親の子育てを、ある程度お手本として見習いたい」「親は身近なお手本となる存在」「自分自身が親に教えてもらったことは、今現在の私にとって、とても役に立っている」

(2) 〈親が自分にしてきたように子供を躾ける〉

褥婦は被養育体験の中で教わり、身についた生活規範や礼儀について、自分の子供にも伝達したいと考えていた。

「物事の善悪の基準は親と一緒になので、子供の躾などもその基準ですとと思う」「社会に出たときの基本的な礼儀など、小さな頃からよく言い聞かせられた。役に立ったことは我が子にも教えたい」

(3) 〈親がしてくれて自分が感謝していることは子供にもしてやりたい〉

褥婦は親がしてくれた嬉しかった体験を振り返り、それを自分の子供にも味わってもらいたいと望んでいた。また楽しい体験をさせてくれた親に対し、感謝の気持ちを表していた。

「親にしてもらって良かったと思うことを、子供にもしてやりたいと思う」「自分が教えられてきて良かったと思えることは、自分の子供にも教えていきたい」「親に感謝していることなど、親を見習って同じように子供を育てていきたい」「子供を産んで、自分が小さい頃祝い膳とかしてもらっていた写真があったとか、着物を着せてもらったとか、少しずつ思い出してきて、自分もこの子にそういう風にしてあげないといけないなと思った」

(4) 〈親から受けた愛情を我が子にも感じてもらいたい〉

褥婦は幼い頃から感じてきた親の愛情を再認識し、親に対する感謝の気持ちを表していた。そして、その愛情を我が子にも感じてもらいたいと願っていた。

「小さい頃には感じないかもしれないけど、今になってとてもありがたみや、愛情を持って育てられたと感じて

いるので、そのように自分も育てる」「親がしてくれた些細なことや言葉で、深く愛情を感じた時を思い出し、自分も参考にしたい」「幼い頃に母親から受けた愛情の記憶は、はっきり覚えているので、それはそのまま我が子にも感じてもらいたいと思う。そういう意味では自分の母親のことは、特に妊娠以来ずっと意識している」

2. 【親の意見を参考にして子育てをする】

褥婦は子育ての経験者である親を尊敬し、子育てでもアドバイザーになって欲しいと望んでいた。

「自分の親は経験者であるので、相談に乗ってもらったり、アドバイスしてもらえるから、自分の子育てにも参考になることは多いと思う」「知恵として知っておくと、考えるときに参考にできる」「これからわからないことができたときは、自分の両親等の意見を参考にしたい」

3. 【親からの学びを自分の育児に生かせる自信】

【親からの学びを自分の育児に生かせる自信】は、〈親が自分を育ててくれた様に子供に接することができる〉〈自分が親にされていやだったことは子供にするまいと思う〉の2つのサブカテゴリーを含んだ。

(1) 〈親が自分を育ててくれた様に子供に接することができる〉

褥婦は被養育体験から学んできた事が、日常生活に役立っていることを実感していた。褥婦はその学びを子育てで実践することができると感じていた。

「自分を育ててくれたように、子供にも同じ接し方をする」「自分が小さかったとき、親が私にしてくれた行為や言葉かけを思い出してきて、自分も同じように子供にしていた」「しかり方や、じぶんがしてもらってこそ、子にできる」「私が愛情いっぱい育てられたので、自分の赤ちゃんにも沢山の愛情を持って接することができると思います」

(2) 〈自分が親にされていやだったことは子供にするまいと思う〉

褥婦は非難されたことや、束縛されたこと等の親の子育てを評価し、親として子供にしてはいけないことや、繰り返してはいけないことを確信していた。

「自分自身が干渉されて育ててきたので、躰は別として自由に育ててあげたいと思う」「親にされていやだったことはするまいと思う」「教えられて嫌だと感じたことを参考にしたい」「親の価値観など、押しつけられていたと思うところは、我が子には押しつけず、いつでも一人の人格として認め見守りたい」

4. 【親の子育ての欠点を再現するかもしれない恐れ】

褥婦は被養育体験が習慣化し、親の子育ての欠点を

認めながらも自分の子供に繰り返してしまうのではないかという不安や危機感を持っていた。

「自分自身がされてきたことは、つい自分の子供にもしてしまう気がする」

5. 【親の子育てに距離をおく】

【親の子育てに距離をおく】は、〈時代や親子関係が異なるため子育ての参考にはならない〉〈子育ては自分達夫婦の考えであるもの〉の2つのサブカテゴリーを含んだ。

(1) 〈時代や親子関係が異なるため子育ての参考にはならない〉

褥婦は、時代の流れに伴う育児環境の変化や、家族における父親の位置や役割変化から、親の子育ての自分の子育てとは異なるものと捉えていた。

「時代も違うし、男親の位置が昔と今とは違うと思う」

「今と昔とは、育て方が違う」「今と昔とは、いろいろ違う」「躰や親と子供の関係は違う」

(2) 〈子育ては自分達夫婦の考えであるもの〉

褥婦は親の養育態度を評価し、夫婦間のつながりを重要視した子育てを望んでいた。

「子育ては夫婦であるもの」「親から子育てとはこういうものと何か教えられたこともないし、具体的なことは、そのときの状況や夫婦の考えを素に決めていくものだと思う」

VI. 考 察

1. 親との関係を再構築する機会

【親からの学びを子育てに生かす】について褥婦は、〈親を自分の子育ての手本にする〉ことをベースに、〈親が自分にしてくれたように子供を躰ける〉方針である。そして〈親がしてくれて自分が感謝していることは子供にもしてやりたい〉と親に対する感謝の気持ちを表現し、〈親から受けた愛情を我が子にも感じてもらいたい〉と望んでいる事が分かる。

榮⁵⁾は生まれてきた子が女性であり将来妊娠した場合、子供時代の被養育体験は胎児や新生児への愛着に連続して影響を及ぼすと述べている。褥婦は出産を終えて子供を抱き、親が我が子を思う気持ちを体験する。そして子供のことを愛おしく思う自分に、育ててくれた親を重ね、親も同じ気持ちを経験してきたことを認識する。褥婦は親から受けた愛情を再認識し、その愛情を我が子にも味わってもらいたいと望み、愛情を注ぐ意志も明らかにしている。褥婦が被養育体験を振り返ることは、親から受けてきた愛情や親への感謝の気持ちを想起し、親との関係を再構築する機会であると考える。

2. 養育方針の基盤形成

【親の意見を参考にして子育てをする】について褥婦は、親の子育てを真似ることで親と同一化し、子育てに適應していこうとしている事が分かる。褥婦は親を子育ての経験者として尊敬し、アドバイザーとして位置づけている。今野⁶⁾は、親から適度の感受性と愛情を与えられた子供は、適切な自尊感情を発達させ、必要な時にはいつでも重要な他者から養育やサポートが受けられる確信を持つことができると述べている。従って、子育てに両親のサポートを受けられると感じている褥婦は、被養育体験において親から適度の感受性と愛情を受けて育ち、適切な自尊感情を発達させてきた褥婦であることが分かる。

【親からの学びを自分の育児に生かせる自信】について褥婦は、〈親が自分を育ててくれた様に子供に接することができる〉と親の子育てからの学びを、自分の子育てで実践できることを確信している。褥婦が親からの学びを承認し、価値を認めていることが、自信に繋がっていると思われる。また褥婦は〈自分が親にされていやだったことは子供にするまいと思う〉と親の子育てを評価している。遠藤⁷⁾によると、母親の被養育経験に対する評価と、現在の子供に対する意識や養育態度には有意な関連があるという。褥婦は親の子育てに賛同する良い部分だけを子供に伝達し、良くない部分は伝達せず、自分の経験として受け止める姿勢であることが分かる。

また一方で褥婦は、【親の子育ての欠点を再現するかもしれない恐れ】も感じている。褥婦は養育方針の基盤を形成しながらも、被養育体験の習慣化から、親の子育ての欠点まで再現してしまうのではないかという危機感を感じている。褥婦は親の子育ての欠点を克服する方法を、模索している過程であることが分かる。

【親の子育てに距離をおく】では、褥婦は自分の親の子育てを評価して〈時代や親子関係が異なるため子育ての参考にはならない〉と感じ、〈子育ては自分達夫婦の考えであるもの〉と捉えている。親の子育てと自分の子育てとの時代背景を客観視したものや、時代の流れに伴う育児環境の変化を考慮したものと考える。しかしこのカテゴリーは親との価値観の相違や、親子関係の調和に問題がある可能性もある。看護師は褥婦がどのような観点から【親の子育てに距離をおく】と捉えているのかを、透察していく必要があると考える。

Rutter⁸⁾は親の生育歴、乳児の特性、養育の質やパターン、社会的要因などの複数の要因が、養育行動の質を決定すると述べている。また数井⁹⁾は、内的ワーキングモデルが親になった際の養育行動の質を決め、その子供もその作用によって親自身の過去とほぼ等質

の愛着スタイルを身につける世代間伝達を起こすという。またそれに対し遠藤¹⁰⁾は、過去に何が合ったかということの記憶よりも、それをどう解釈し統合しているかが本質的な要因であると述べている。

内的ワーキングモデルは青春期の終わり頃に安定し、ライフサイクルのテンプレートになる¹¹⁾。従って本研究での褥婦は、ある程度の内的ワーキングモデルのテンプレートを構成していると考えられる。故に、その褥婦の被養育体験だけが養育行動を決定する要因ではなく、褥婦自身がその体験をどのように受け止め統合していくかという過程と、それを行う機会が重要であるといえる。産褥早期に被養育体験を理解・統合していくことは、子供の養育方針の基盤を形成する重要な過程であると考えられる。

Rubin¹²⁾は産褥早期の母親になるプロセスは、取り込み (taking-in) という依存・受容的な段階から、取り入れ (taking-on) 及び積極行動に移行すると述べている。産褥早期の依存・受容的な状態にある褥婦をサポートしていくのは、家族や看護師である。看護師の役割として、褥婦の被養育体験を理解・統合する作業を支援していくことが重要課題となる。看護師は分娩後の様々なケアの中で、被養育体験を振り返る機会を提供し、被養育体験の理解を傾聴し、統合する作業を援助していくことが望ましいと考える。

VII. 結語

本研究は、本研究は褥婦の産褥早期における被養育体験の意味を明らかにし、看護師の支援の在り方を検討した。その結果、5つのカテゴリーが抽出された。褥婦は被養育体験を振り返り、【親からの学びを子育てに生かす】【親の意見を参考にして子育てをする】ことを望んでいる。そして【親からの学びを自分の育児に生かせる自信】を持つ一方で、【親の子育ての欠点を再現するかもしれない恐れ】も抱いている。また【親の子育てに距離をおく】では、親の子育てと自分の子育ては異なることを認識していた。

これらより産褥早期の褥婦が被養育体験を理解し統合することは、親との関係を再構築する機会であり、今後の養育方針の基盤を形成する重要な過程であることが明らかになった。また産褥早期に関わる看護師は、褥婦が被養育体験を解釈・統合する作業を支援する必要性が示唆された。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり、ご協力頂きました褥婦の皆様、並びに施設の皆様に、深く感謝致します。

文 献

- 1) J Bowlby/黒田実郎:母子関係の理論 分離不安, 岩崎学術出版社, 東京, 224-229, 1973/1991.
- 2) 金政祐司:成人の愛着スタイル研究の概念と今後の展望—現在 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは—, 対人社会心理研究, 3, 73-84, 2003.
- 3) 大村典子, 山磨康子, 松原まなみ 他:周産期における母親の内的ワーキングモデルと胎児及び乳児への愛着, 日本看護科学会誌, 21 (3), 71-79, 2001.
- 4) 辻野順子, 雄山真弓, 乾原正 他:母親の胎児及び新生児への愛着の関連性と愛着に及ぼす要因 知識発見法による分析, 母性衛生, 41 (2), 326-335, 2000, 5)
榮玲子:妊婦の胎児への愛着形成に影響する要因の検討, 日本助産学会誌, 18 (1), 49-55, 2004.
- 6) 今野義孝, 水谷徹, 星野常夫:わが子虐待の早期発見と早期教育に関する考察 母子の愛着形成とわが子虐待の予防, 文教大学教育学部紀要, 35, 105-117, 2001.
- 7) 遠藤利彦, 江上由実子, 鈴木さゆり:母親の養育意識・養育行動の規定因に関する探索的研究, 東京大学教育学部紀要, 31, 131-152, 1991.
- 8) Rutter M, Clinical implications of attachment concepts: retrospect and prospect. Department of Child & Adolescent Psychiatry, Institute of Psychiatry, London, U.K. J Child Psychol Psychiatry. 6 (4), 549-71, 1995.
- 9) 数井みゆき, 遠藤利彦, 田中亜希子 他:日本人母子における愛着の世代間伝達, 教育心理研究, 48, 323-332, 2000.
- 10) 遠藤利彦:内的作業モデルと愛着の世代間伝達, 東京大学教育学部紀要, 32, 203-220, 1993.
- 11) Salzman JP: Primary attachment in female adolescents: association with depression, self-esteem, and maternal identification, Psychiatry, 59 (1), 20-33, 1996.
- 12) Rubin R R/新藤幸恵, 後藤桂子訳:ルヴァ・ルービン母性論 母性の主観的体験, 医学書院, 東京, 1997.

要 旨

本研究の目的は、初産褥婦の産褥早期における被養育体験の意味を明らかにし、看護者の支援の在り方を検討することである。正期産分娩となった初産褥婦30名を対象に自記式質問紙による調査を実施した。その結果、5つのカテゴリーが抽出された。初産褥婦は被養育体験を振り返り、【親からの学びを子育てに生かす】【親の意見を参考にして子育てをする】と考え、【親の子育てからの学びを自分の育児に生かせる自信】を持っていた。しかし一方では【親の子育ての欠点を再現するかもしれない恐れ】を抱き、不安な感情を表出していた。また【親の子育てに距離をおく】では、親の子育てと自分の子育ては異なることを認識していた。これらより産褥早期の初産褥婦が被養育体験を理解し統合することは、親との関係を再構築する機会であり、養育方針の基盤を形成する重要な過程であることが明らかになった。産褥早期に関わる看護者は、褥婦が被養育体験を解釈・統合する作業を支援する必要性が示唆された。

キーワード:産褥早期, 初産褥婦, 被養育体験, 内的ワーキングモデル, 子育て